砺波市の参道狛犬

尾　田　武　雄

はじめに
Ⅰ　狛犬研究史
Ⅱ　砺波市内の神社
Ⅲ　砺波市内の参道狛犬
Ⅳ　神殿狛犬の調査に向けて

はじめに

砺波地方の石仏調査に40年ばかり関わり、珍しい石仏などと対面してきたが、狛犬に関しては案外無頓着であったと思う。石仏を調査研究する方やその愛好者の間では、その他に石神、石塔、手水鉢、石鳥居、そして狛犬も研究対象とされているが、狛犬だけにこだわって研究している人は案外知られていないと思う。

その中で、元北陸石仏の会副会長の柳澤栄司氏は、平成初期から調査を行い写真記録も残されている。また、北陸石仏の会会員の酒井靖春氏、平井一雄氏なども、富山県内の狛犬調査を行っている。筆者もその影響を受けて狛犬調査を散発的に行ってきた経緯はある。

その結果では、砺波市内の参道狛犬は年次在銘から明治後期以降の造像がほとんどであった。また、地元石工による個性的な狛犬は露座のため特に風化が激しく、建て替えられた事例もあり、緊急の調査が必要と感じている。さらに視点を移すと、神社堂内にある神殿狛犬は、古いものでは参道狛犬の建立以前の造像も多く、調査が必要と思われる。

先ず、近年の全国的な研究動向を示すと、日本石仏協会会長の大野邦弘氏らによる参道狛犬の調査報告がある。一般向けに、三遊亭円丈著『THE 狛犬！コレクション参道狛犬大図鑑』（昭和60年）や日本狛犬研究会編『参道狛犬研究』（平成12年）などが刊行されており、狛犬に目を向けられる様相が生じている。上杉千郷著『狛犬事典』（平成13年）、ねずてつや著『狛犬学事始』（平成6年）もあり、廣江正幸・永井泰著『出雲・岩見狛犬見聞録』（平成22年）は、出雲の来待（きまち）石（いし）造りの独特な狛犬の報告であり、全国的な視野に立つ基礎研究となり得ると評価したい。

今回、砺波市教育委員会により神殿狛犬の調査が行われることになり、この機会に参道狛犬を報告する。

Ⅰ　狛犬研究史

県内における石仏の調査研究は全国的に進んでいるかと思うが、神社境内に石造の狛犬はたくさん見受けられる割には、研究成果は石仏の比でなく数少ないのが現状だと思う。このような中で、石造美術研究家の京田良志氏[注1]、南砺市の旧福野町教育委員会[注2]、小矢部市教育委員会[注3]、小杉町教育委員会[注4]などは、狛犬に限らず石造物に刻字のあるものを調査している。狛犬単独で調査報告したものとしては、富山市大山歴史民俗資料館の企画展「さまざまな狛犬の姿と形」（平成22年）[注5]がある。旧大山町地域の石造狛犬58体を神社名、所在地、建立年月銘、石工銘、石材、角、耳、目、鼻、眉、髭、爪、尾、彩色などと細かく調査し、考古学者の小林高範氏の精力的な取り組みとして学術的な調査報告である。また、『氷見春秋』第46号（平成14年）～第56号（平成19年）に、大口昭夫氏が「氷見市の石造狛犬」として８回にわたる掲載や、西井龍儀・宮田進一・大野究の三氏による「氷見の石造物」『氷見市史資料編８文化遺産』（平成19年）があり、富山石文化研究所長の古川知明氏には、神通川流域の石工調査の中で狛犬に関する報告がある。西井龍儀・久々忠義の両氏は「越中の小型狛犬・越前狛犬」『日引』第14号（平成27年）の中で、越中における小型狛犬と越前狛犬63点を報告している。

なお、筆者も『北陸石仏の会研究紀要』第３号（平成10年）で「富山県の野にある狛犬」、『富山写真語万華鏡88　越の狛犬』（平成11年）で「狛犬考」を寄稿しているが、県内の石造の狛犬調査は緒に就いたところと言いたい。

Ⅱ　砺波市内の神社

砺波市内には、「富山県知事管轄宗教法人台帳（平成26年）」によると仏教系寺院数として89カ寺、神社数として143社が報告されている。この神社数に関して推移を述べると、富山県神社庁による『富山縣神社誌』（昭和58年）では、旧砺波市内116社と旧庄川町内24社で140社を数える。また、『砺波市史資料編４民俗・社寺』（砺波市史編纂委員会・平成６年）で120社、『庄川町史上巻』（庄川町史編さん会・昭和50年）で24社、合計153社の報告がある。

神社は、日露戦争以降に地域にあった小祠の統廃合が進められた。これは明治39年の二つの勅令によって神社合祀の勧奨が行われたもので、同年４月に「府県社以下神社ノ神饌幣帛料供進ニ関スル件」、８月に「神社寺院仏堂合併跡地ノ譲与ニ関スル件」がある[注6]。さらに以前の神社の姿を知るには江戸時代の「正徳二年九月堂宮社人山伏持分并百姓持分相守申品書上ケ申帳」（富山大学附属図書館蔵　十村文書「川合文書」中）があり、「正徳二年社号帳」と略称される。これは、加賀藩寺社奉行の命を受けて、藩内各郡の十村（庄屋）が管轄地内の堂宮を調べて郡奉行に報告したもので、砺波郡に関するものが残されている。また、射水郡のものは、砺波市庄川町庄の神職藤井秀直氏蔵（写）がある。これらによると、正徳2年（1712）に、砺波郡には堂宮が765社、射水郡には708社と報告されている。また、砺波郡の堂宮の中で、神明あるいは神明林とされる伊勢系の堂宮は247社あり、全体の32%を占めており特徴となっている。

さらに砺波市内に限れば、「正徳二年社号帳」には161社の堂宮があり、神明62社、八幡22社、五社系８社、山王系６社、宇志多気権現系５社、熊野系５社、春日大明神３社、白山権現系３社、諏訪大明神２社などであり、仏教系として観音７社、地蔵５社などがある。38%が神明系で、11%が仏教系である。これは砺波平野には能登石動山の定着修験者が多く入り、山岳修験の影響があったとみる[注7]。多数の神明系では、江戸期初頭前後に、本格的に開拓された庄川扇状地の散村や、江戸期に入って開拓された芹谷野などの段丘上の新しい村々に勧請されている。幕末に向けて伊勢信仰はめざましい展開をみせる訳である。江戸期に入って散村の中核部に出町や福野の町立てが始まるが、これらの町の産神も神明社である。ちょうど伊勢信仰の伸長期と重なって、新村や町立てに神明が勧請されたのである。そこには伊勢御師の役割が大きかっただろう。一方、平野部の微高地や中山間地には八幡や五社権現、宇志多気権現、山王権現、熊野などの堂宮が多くみられる。

Ⅲ　砺波市内の参道狛犬

「正徳二年社号帳」にみられる堂宮の多くは石造の小祠であったろう。そこに狛犬があったとしても極めて小さなものに限られるだろう。

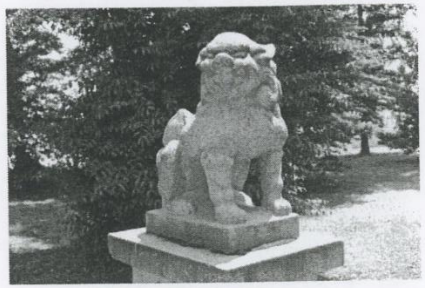
話を今日に移すと、平成27年（平成の市町合併後）に、市内の神社135社を訪ねて参道狛犬の調査を行った。境内では狛犬数が128対、うち年次在銘があるもの87対が確認できた。江戸期の造像年のものはみえず、明治期が5対、大正期が24対、昭和期戦前が23対、同戦後が23対、平成時代が12対であった。参道狛犬の造像は、神社合祀がきっかけによるものがほとんどと思われる。狛犬のない神社は25社である。氏子数が少ないなど、狛犬を造像することができない要因があったのだろう。ところで、面白い言い伝えがあるのは、砺波市街地の北東部に位置する油田地区中村の神明社である。この集落の神様は猿とされ、犬を嫌うので犬を飼う家がなかったといわれ、そのためだろうか、この神社では狛犬を建立されることがなかったとされ、今もないという。

次に、無銘であるが、造像が江戸後期のものと思われるのは、般若地区安川の日吉神社内にある神明社の狛犬である。これは、高岡市中田町の移田（いゆだ）八幡宮内にある神明社にある台座に「文政二年」銘とある狛犬と良く似た胴長スタイルの狛犬である。ゆえに日吉神社の狛犬も同時代と思われる。

明治期から昭和前期の狛犬は地元石工によるものが多いが、関西系、出雲方面（出雲型）あるいは金沢からの石工の進出も見受けられる。その後、昭和60年代に入ると中国製の狛犬が入り込み、平成期になると、ほとんどが中国製になる。別表に市内にある石工名および造像年月日がある狛犬を記す。

・関西系狛犬

柳瀬地区の比賣神社や春日神社の狛犬には「明治三十一年十月吉日」とあり、五鹿屋地区の鹿島神社の狛犬には「大阪天満寺町橋石工石松」とある。これらは花崗岩製で関西方面から移入されたものである。柳瀬地区の狛犬は同地起業のいわゆるゼネコンの関係者建立だろうと思われる。このような石質で江戸末期の建立とみられる狛犬が、射水市新湊の神社でよく見かける。市内で良く見かける花崗岩製の狛犬は、昭和期の戦前戦後頃のもので、愛知県岡崎市などからの移入が大半と思われる。



関西系狛犬（鹿島神社）

・金沢型狛犬

次に、庄川町古上野五ケの五ケ堂神社の狛犬は、金沢石工の手にかかるものであろう。参道右側が口を結んだ吽形像、左側が子を股に挟み、口に球をくわえる阿形像である。ともに座り型では無く、四足スタイルで立っている。石質は、金屋石に似た緑色凝灰岩である。金沢型の特徴である逆立ちをする狛犬ではなく、動きがある姿である。市内ではこの１対のみ確認している。金沢石工には、南砺市広安の平田神社に「大正二年石工福島伊之助」と銘のある逆立ちをした狛犬がある。また高岡市福岡町小野の八幡宮にも平田神社と似たような狛犬があり、「金沢石工福嶋伊之助」と銘がある。

金沢型狛犬（五ケ堂神社）

・出雲型狛犬

島根県松江市宍戸町の来待（きまち）地区には、古くから凝灰質砂岩の「来待石」と呼ばれる良質の石材が採れた。この石で制作された狛犬が日本海側に広く展開し、出雲型狛犬として知られる[注8]。この狛犬の特徴としては、長い垂耳に、背筋を伸ばして蹲踞（そんきょ）する「座型」と、腰を上げて前傾に身構える「構え型」があり、市内では「座型」をみかける。また、出雲型狛犬は、一般的に四角い台座を用い、牡丹が彫刻されている場合が多い。出町表町西之神祠、徳万十五社神社、東別所上村天満宮にある。東別所上村天満宮の狛犬には「石工田中」の銘があるが、これは安川石工の田中苔石堂で、出雲からの移入品に銘を入れたものであろう。

出雲型狛犬（出町表町西之神祠）

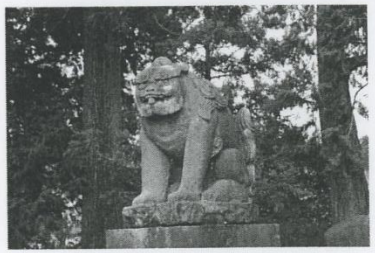
・砺波型狛犬

砺波地方の石工では、明治期に石仏を精力的に制作し、一生の間に一千体の石仏を作ったとされる庄川町金屋の森川栄次郎や、さらに江戸期の井波石工の石崎弥吉や常川茂太郎、城端石工の岩城竹吉の名が知られるが、狛犬の悉皆調査がなされていないため全貌は明らかではなかった。

今回の市調査により、大正期の「井波町石工森野善四郎」の銘がある狛犬が分布しているのが分かった。庄川町示野の神明宮には「大正十二年九月」「石工井波森野善四郎」、庄川町三谷の水宮神社「大正十五年二月建立」「石工井波森野善四郎」の銘があった。一方、南砺市野原の神明宮に「大正八年八月二十九日」「石工井波森野善四郎」、同市広安の平田神社に「石工井波森野善四郎」の銘があり、ほかにも存在するだろう。

森野善四郎作の狛犬は、ずんぐりと堂々とした容姿でしっかりと足を地につけ、首を屈めたスタイルで、左右とも阿形で口を開けているのが特徴である。富山市婦中町鵜坂の鵜坂神社にもこの狛犬がいる。また、庄川町小牧の八幡宮には、石材が花崗岩で同様のスタイルの狛犬がいる。台座には「加藤組」「加藤金次郎」の銘がある。加藤とは当時東洋一を誇った小牧ダムの堰堤工事を請け負った人物である。このような特徴的な狛犬は類例が少ない[注8]。郷土史に詳しい南砺市の千秋謙治氏も「なぜかア・アの狛犬」である井波石工による特徴的な狛犬が、利賀村地域の百瀬川沿いに見られることに言及されていた[注9]。この個性的な狛犬を砺波型と称したい。

砺波型狛犬（三谷水宮神社左）



砺波型狛犬（同社右）

Ⅳ　神殿狛犬の調査に向けて

ここまで参道狛犬について述べてきたが、市内神社にある神殿狛犬の調査内容については、西井龍儀氏、中島良江氏の別稿をご覧いただくが、多くの成果を得ている。その材質を大別すると、主に木造、石造、陶製、銅製の４種となる。特に古様と思われるものとして、①木造の下中条比賣神社狛犬、②石造（薮田石）の柳瀬比賣神社狛犬[注10]、③木造の太田住吉神社狛犬[注11]、④木造の東別所上村天満宮狛犬、⑤石造（笏谷石）の伏木谷宇志多気社狛犬をあげたい。特に、太田住吉神社の狛犬に、「寛文三年　う年三月上三口大佛師□下大□施主太田　次郎□□権六□助」の造立年、施主、製作者の銘が見えることは県内でも貴重である。これらの狛犬の位置関係をみると、砺波平野扇央部の散村地域に多くの神明系の神社が存在するが、そこには神殿狛犬はあまり見受けられない中、その域内であっても、中世にさかのぼる徳大寺家領般若野荘の相当地域にあたるといえる。

本稿は、今回の神殿狛犬の調査に際し、狛犬の全体像を示す必要から作成したものである。一般的にみると、狛犬はどれも同じで単調に感じるが、細かな調査から実に多様な狛犬が存在していることに驚かされた。また、明治期に建立された参道狛犬は、かれこれ百年を超え、風化によって崩れかけたり、諸事情により建て替えが必要であったりしており、中国製狛犬に替えられたものもある。さらなる詳細な狛犬調査は喫緊の課題である。

（おだ・たけお　日本石仏協会理事）

（注）

（１）富山市教育委員会・京田良志民俗サークル編『富山市石仏石塔等調査中間報告書』第１冊 昭和51年、第２冊 昭和53年、第３冊 昭和54年

（２）福野町教育委員会・ともしび会あゆみグループ編『福野町のいしぶみ（安居地区）』昭和58年、『同（中部・北部）』第二集 昭和60年、『同（東部・高瀬地区）』第三集 昭和62年、『同（南部・西部地区）』平成元年

（３）小矢部市教育委員会・高齢者ボランティアグループ編『小矢部のいしぶみ第１集石動地区源平合戦古跡』昭和61年～『同第16集総集編』平成16年

（４）小杉町教育委員会・小杉町立中央図書館編『小杉町のいしぶみ第一集（戸破・三ケ地区）』平成４年、小杉町教育委員会・小杉町女性ボランティア講座『同第二集（橋下条・太閤山・金山地区）』平成５年、『同第三集（池田・黒河・大江地区）』平成６年

（５）富山市大山歴史民俗資料館編『平成22年富山市大山歴史民俗資料館企画展「さまざまな狛犬の姿と形」』

（６）由谷裕哉『神社合祀再考』令和２年、國學院大學日本文化研究所編『神道辞典』平成11年

（７）木場明志「越中砺波の定着修験」『白山・立山と北陸修験道』昭和52年

（８）尾田武雄「砺波型狛犬」『北陸石仏の会々報』第49号　平成28年

（９）千秋謙治『瑞泉寺と門前町井波』平成17年

（10）砺波市教育委員会『柳瀬比賣神社石造物報告』平成28年

（11）太田住吉神社『住吉神社史』平成30年

別表　石工名および建立年次等がある狛犬（砺波市　筆者調べ）

	位置	神社名	石工名	年次等
1	砺波市庄川町金屋	神明宮		明治二十九年九月
2	砺波市柳瀬	比賣神社		明治三十一年十月吉日建之
3	砺波市東開発	春日神社		明治三十一年十月吉日建之
4	砺波市庄川町古上野	五ケ堂神社		明治三十九年十月建之
5	砺波市鹿島	鹿島神社	大阪天満寺町橋石工石松	明治四十年四月建之
6	砺波市井栗谷	栃谷神社		大正元年九月
7	砺波市福岡	福岡神社	石工田中	大正二年四月
8	砺波市庄川町庄	雄神神社	石工西元源治	大正五年十一月
9	砺波市庄川町庄	雄神神社	石工西元源治	大正五年十月吉日
10	砺波市秋元	八幡神社		大正六年丁巳八月
11	砺波市東別所（上村）	天満宮	石工田中	大正八年四月
12	砺波市荒高屋	神明社		大正八年九月
13	砺波市高波（北高木）	八幡宮		大正八年十月建之
14	砺波市野村島	桑野神社		大正九年三月建之
15	砺波市林小杉	小杉神社		大正九年建之

	位置	神社名	石工名	年次等
16	砺波市宮丸	木舟社		大正十年七月建之
17	砺波市小島	小島神社		大正十年八月
18	砺波市栃上	栃上神社		大正十年九月
19	砺波市苗加	苗加神社		大正十一年九月
20	砺波市東石丸	東石丸神社	富山市石匠桑原亀太郎	大正十一年建之
21	砺波市祖泉	祖泉神社		大正十二年九月
22	砺波市庄川町示野	神明宮	井波町石工森野善四郎	大正十二年九月
23	砺波市宮森	大森清水川神社		大正十二年
24	砺波市木下	神明社		大正十三年四月建之
25	砺波市庄川町三谷	稲荷神社		大正十三年九月建
26	砺波市市谷	牛嶽神社		大正十三年十一月建之
27	砺波市高波（東宮森）	春日神社		大正十四年八月
28	砺波市庄川町三谷	水宮社	石工　井波町　森野善四郎	大正十五年　建之
29	砺波市庄川町青島	神明宮	石工出町水木	大正十五年九月
30	砺波市千保	千保神社	石工水木	昭和二丁卯十月
31	砺波市石丸	神明宮	出町石工　水木	昭和四年八月
32	砺波市中野	中野神社	石工出町水木	昭和五年四月
33	砺波市（出町）中神	熊野社		昭和五年
34	砺波市五郎丸	神明社	高岡市　石工中川	昭和六年四月建之
35	砺波市（出町）太郎丸	八幡宮		昭和九年□□
36	砺波市庄川町金屋	八幡宮		紀元二千五百九十四年建立
37	砺波市正権寺	五社能社	石工安川田中庄蔵	昭和十年四月
38	砺波市東別所	神明社		昭和十年十月建之
39	砺波市上和田	熊野神社		昭和十二年四月
40	砺波市東中	東中神社	石工出町水木	昭和十二年建之
41	砺波市東保	五社神社		昭和十三年十月
42	砺波市徳万新	天高神社		紀元二千五百九十八年
43	砺波市太田（西区）	神明社		昭和十四年十月建之
44	砺波市千代	千代神社		昭和十五年十月建之
45	砺波市上中野	稲荷社		紀元二千六百年
46	砺波市（高波）荒屋	神明宮		皇紀二千六百年
47	砺波市（出町）鍋島	八幡宮		昭和二十年九月
48	砺波市宮村	日吉神社	石工田中	昭和三十四年四月十日
49	砺波市新明	八幡社		昭和三十五年三月建之
50	砺波市庄川町金屋	神明宮		昭和三十九年四月
51	砺波市三合	三合神社		昭和三十九年十一月建之
52	砺波市東別所（下村）	八幡社		昭和四十年五月
53	砺波市権正寺	白峰神社	石工砺波市太田平木正保	昭和四十一年十月二十八日
54	砺波市井栗谷	常盤岡八幡宮		昭和四拾参年四月
55	砺波市庄川町庄	神明宮		昭和四十五年十月吉日
56	砺波市庄川町五ケ	五ケ神社		昭和四十六年九月建之
57	砺波市太田	住吉神社	石工　富山市伊藤伸一	昭和四十七年十月
58	砺波市寺尾	神明社		昭和四十七年十月
59	砺波市頼成	林神社		昭和五十一年十一月
60	砺波市鷹栖	木船神社		昭和五十五年十月吉日建之
61	砺波市林	林神社		昭和五十五年十一月
62	砺波市新明（西島）	神明社		昭和五十六年十月
63	砺波市堀内	神明宮		昭和五十六年十一月
64	砺波市庄川町示野	神明宮		昭和五十七年十一月
65	砺波市福山	神明社		昭和五十九年十一月吉日
66	砺波市（出町）大辻	神明社		昭和五十九年十一月吉日建之
67	砺波市芹谷	八幡社		昭和六十年十一月吉日
68	砺波市伏木谷	宇志多気社	石工飛騨古川(有)砂原石材	昭和六十一年十月二十四日
69	砺波市（出町）神島	神嶋神社		昭和六十二年八月吉日
70	砺波市上和田	熊野神社		平成元年四月吉日
71	砺波市安川	日吉神社		平成元年四月吉日
72	砺波市東別所	神明社		平成元年十月吉日
73	砺波市花島	神明宮		平成四年仲秋
74	砺波市東別所（中村）	牛嶽神社		平成九年十月吉日
75	砺波市木下	神明社		平成十年十二月吉日
76	砺波市杉木	日吉社		平成十一年三月一日建之
77	砺波市浅谷	神明社		平成十二年十月吉日
78	砺波市坪野	坪野神社		平成十四年十月
79	砺波市八十歩	神明社		平成十九年十月
80	砺波市高波（江波）	江波神社		平成二十年九月
81	砺波市市谷	牛嶽神社		平成二十一年五月吉日
82	砺波市増山	増山神社		平成二十五年十月

*（　）内は住居表示に必要がない地名

神殿狛犬と参道狛犬

西　井　龍　儀
中　島　良　江

はじめに
Ⅰ　神殿狛犬と参道狛犬
Ⅱ　砺波市内の神殿狛犬
Ⅲ　狛犬の向きと前肢
Ⅳ　狛犬の用材
Ⅴ　狛犬の造像年代
まとめ

はじめに

この度、砺波市教育委員会は砺波市文化財保護審議会とともに、平成29年より砺波市内の神殿狛犬の悉皆調査を実施した。「狛犬」は参道狛犬と神殿狛犬とに分けられ、一般的には神社の参道の両側に置かれて、江戸時代以降に作られるようになった参道狛犬を思い浮かべるが、神社の中もしくは軒先などに置かれ、ご神体を守っていた神殿狛犬は起源が古く、平安時代には木造、鎌倉時代以降には石造の神殿狛犬が作られている。今回、審議会の尾田武雄氏の調査により、市内の参道狛犬は明治以降の作であることが判明する一方、住吉神社（太田地区）の神殿狛犬には寛文３年（1663）の銘があって、富山県内の文化財指定を受けている狛犬に在銘のものがなく、本調査を実施する動機となったところである。

調査にあたっては、市内の神社の宮司と各地区の公民館の皆さんに、神殿の中もしくは軒先に狛犬がないか報告をいただいた。そのほか、これまでの砺波市史編纂事業や文化財等の調査における記録をもとに現地調査を実施した。方法としては、事前に調査カードを作成し、所在地、地区、管理者、数量、安置場所、素材、法量のほか、神殿狛犬の姿勢、角、たてがみ、尾の形、雌雄、台座の形といった様式について、制作時期の手がかりとなる事象を記録した。

令和２年度末の時点において、市内の神社153社の内、18社で15対と４体、合計34体の神殿狛犬を確認した。素材としては、木造、石造、陶製、銅製の４種で、内訳は、木造７対と２体、石造５対と２体、陶製２対、銅製1対であった。特に木造の神殿狛犬では、昭和時代以降の井波彫刻によるものと、銘はないものの様式や素材の状態から中世にさかのぼりうるものがあった。特に古い様式の特徴を持つ神殿狛犬は、現在の高岡市中田から市内庄川町三谷にかけての庄川両岸地域に分布し、中世に徳大寺家を領家とした般若野荘のエリアや周辺の山間部の交通の要衝であった地域に多く分布していた。これは神殿狛犬の伝播や流通とも関連していると考えられる。

ついては、尾田武雄氏が、狛犬の研究史と市内の参道狛犬の特徴を別報告で述べる。また、審議会の西井龍儀は、本報告の次節以降において、神殿狛犬の現地調査を踏まえて実測図を作成し、様式や素材について詳しく述べる。

Ⅰ　神殿狛犬と参道狛犬

狛犬は本来、神（仏）を守護する意図で神殿に配置されてきた。神殿といってもかつては今日のように集落ごとに拝殿、幣殿、本殿が整備されたところばかりとは限らず、小規模の社殿、合祀された祠などでの狛犬の存在はよく分からない。むしろ狛犬を配置できる規模の神殿、狛犬の大きさに比例した神殿規模であるとの見方ができる。

狛犬の配置はより本殿に近く、扉両脇や階（きざはし）両側に、阿形、吽形一対で配置され、本殿に向って右側が阿形、左側は吽形が一般的である（図１）。

さて、神殿狛犬と参道狛犬を区別するようになったのはいつ頃かはっきりしない。参道狛犬に着目し、全国２千数百の神社、仏閣を巡って、狛犬をタイプ分類した三遊亭円丈氏は神殿狛犬と参道狛犬を分けている（三遊亭円丈1995）。神社の境内は一般の参拝者の出入りは容易であるのに対し、神殿内の出入り、とりわけ本殿へは制約があり、本殿近くに配置された狛犬を間近で見ることは限られる。

ここで、神殿狛犬の特徴を要約すれば次のようにあげられよう。

・狛犬の位置、配置は神殿の屋内、もしくは軒先で、本殿に向かって左右に阿形、吽形一対が対面して配置される。
・狛犬の材質は大部分が木造で、ほかに石造、陶製、

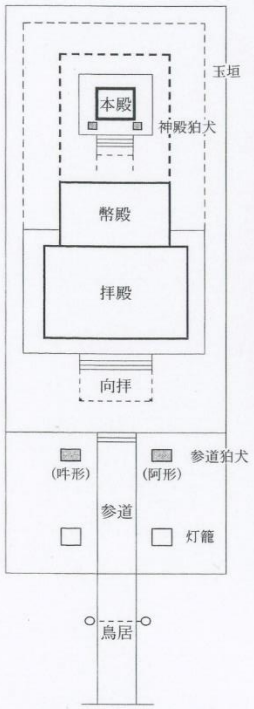


図１　神社と狛犬の位置

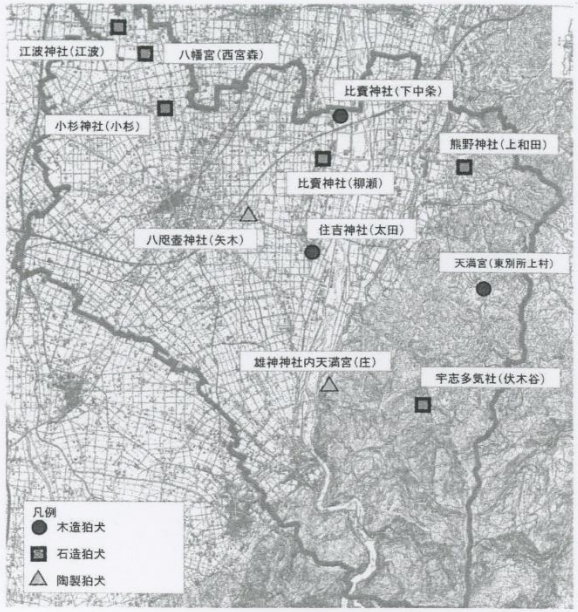


図２　砺波市内の神殿狛犬分布図

表１　報告した神殿狛犬一覧表

種類	集落	神社名	安置場所	阿吽	総高	像高	像幅
木造	下中条	比賣神社	本殿	阿形	41.5	41.5	23.9
	上　村	天 満 宮	奥殿	阿形	20.5	20.5	10
				吽形	21.5	21.5	10.2
	太　田	住吉神社	拝殿	阿形	43.4	38.9	19.2
				吽形	44.8	38.6	19
			社務所の蔵	吽形	38.2	38.2	15
石造	伏木谷	宇志多気社	本殿	不明	30.5 (推定)	28.0 (推定)	不明
	西宮森	八 幡 宮	本殿	阿形	20.3	17	10.5
				吽形	20.8	17	10.7
	小　杉	小杉神社	本殿	吽形	37.5	35	42
	上和田	熊野神社	本殿	阿形	60.3	46.7	19.5
				吽形	59	45.4	19.5
	江　波	江波神社	本殿	阿形	60	53.5	21
				吽形	61	54	19.6
陶製	庄	雄神神社内天満宮	軒先	阿形	20.8	20.8	14
				吽形	22.4	22.4	13.9
	矢　木	八咫壺神社	本殿	阿形	30.4	28.4	19.9
				吽形	32.3	30.5	18

金属製がある。木造以外は軒先にあっても風雨の影響は少ない。

・狛犬と一体の台座は木造にはなく、石造では板状の台座が伴う。陶製では板状台座がつくもの（矢木八咫壺神社）とつかないもの（庄雄神神社内天満宮）がある。

・台座下部の基礎に「奉・納」と「施主」を表記するものは石造で江波神社にあり、上和田熊野神社では狛犬と一体の台座に「施主」を表す。木造狛犬では別造の台座、基礎は見られない。参道狛犬では基礎下に単独の基壇が造られる。

Ⅱ　砺波市内の神殿狛犬

本稿では、これまで調査した10ヶ所、18体の狛犬（表１・図２）を木造、石造、陶製の順に紹介する。

（１）木造狛犬

１　下中条比賣神社　阿形（図３-①）

下中条比賣神社には阿形のみが残り、吽形はない。狛犬は口を大きく横長にあけ、前方を向いて坐る。右前肢と他の脚端部を欠損するが、像底から像高を復元すると像高41.5㎝、像長44.0㎝で像長が像高よりやや

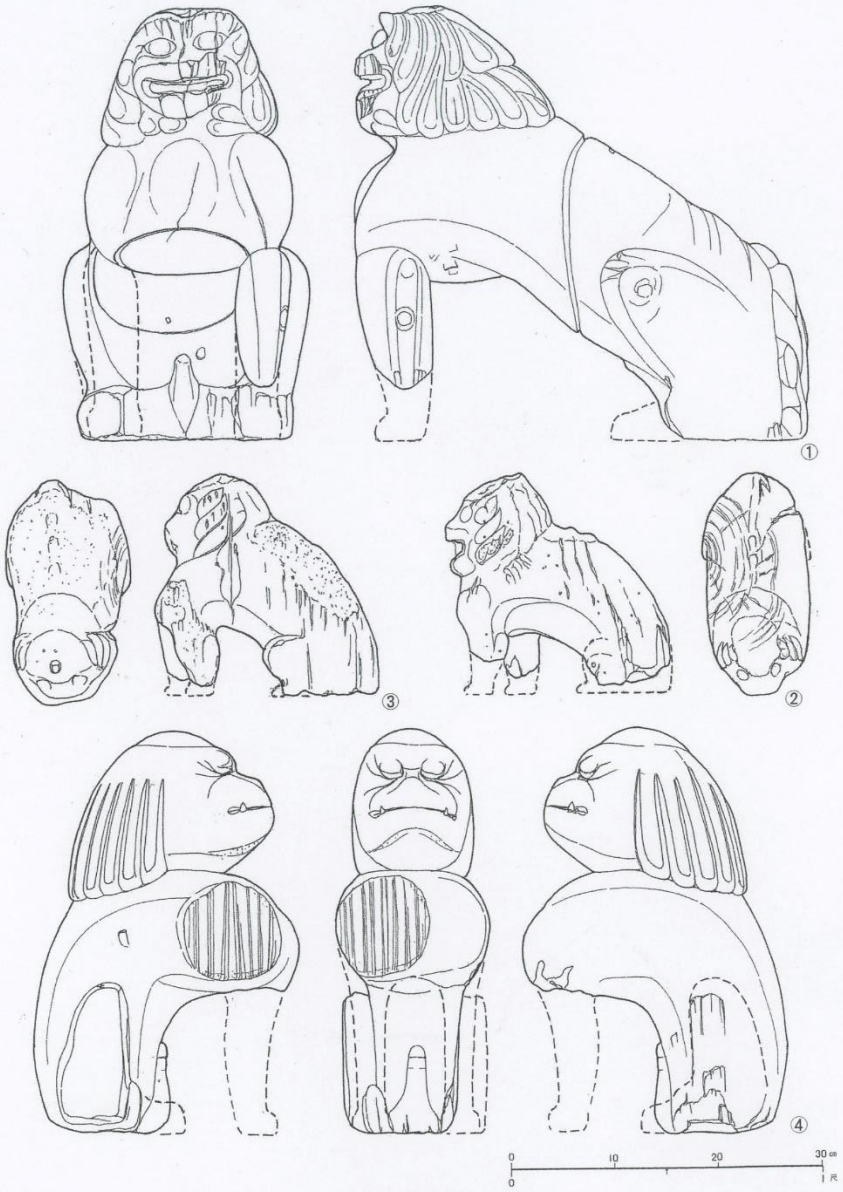


図３　木造狛犬（縮尺１：５）

① 下中条比賣神社 阿形　② 東別所上村天満宮 阿形　③ 東別所上村天満宮 吽形　④ 太田住吉神社 吽形

大きい。

胸と両肩を鼻先まで張り出し、前肢は直立する。この前肢と直線的な背筋、水平な像底から、狛犬の側面観は大凡直角三角形である。体部は胴長で、前後のほぼ中間で二分し、割れ面を角釘で接合している。体部に放射状方向の干割れがあり、接合部の右下近くに樹心がある直径約60cm超の用材を縦方向に使用している。たてがみは房状多段で、側面前方では１段、後方では２段となって分かれ、房数は16に分かれる。たてがみの下端は丸くふくらみ、顎下左右にも２個ずつの旋毛がある。

尾は房状で７支に分かれるが左右非対称で、その端部は丸くなるもの、尖るもの、巻き込むものなど不揃いで、長さも異なる。左前肢には筋肉を表す縦筋があり、その中間外側に円形の旋毛がある。

後脚は体部側面から突出しており、左脚膝頭近くに樹幹からの枝を取り込んでいる。股間に雄性器を表す。

狛犬阿形の口元や顎先を一部欠損するものの、顔面やたてがみ、体部など全体に優れた彫成である。この狛犬がいつ頃の造像かは類例の調査比較を待つが、たてがみの房状多段や、体部側面観の直角三角形は、越前狛犬の髪形分類や体躯分類（三井2012）によるならば、髪形の多段房形は16世紀代に多く見られ、体躯の直角三角形は17世紀前期から中頃の狛犬に多く見られるという。越前狛犬は笏谷石による石造であり、越前と当地と地域も異なることから同一視はできないが参考となるだろう。

２　東別所上村天満宮　阿形、吽形（図３-②、③）

狛犬は阿形（図３-②）と吽形（図３-③）があり、両像は像高、像長とも約21cm前後と小型で、全体に虫食い、劣化が進み、欠損部もある。

阿形は肢脚部下端をそれぞれ欠損している。口をあけた頭部は大きく、体部は背筋を丸め、太い前肢を直立し、右肢をやや下げて坐る。後脚は小さく控え目で、体側よりわずかに外へ張り出し、股間に雄性器を表す。頭部はほぼ前方を向くが、前肢の前後とは逆に、わずかに左前方を向く。たてがみは毛筋垂下状の可能性もあるが不鮮明で、両側面では３段に重ねる。尾は欠損して不詳だが三支の可能性がある。木取りは樹心を右側後脚外にはずした心去り材である。

吽形は胸を鼻先より大きく張り出し、背筋を丸くして坐る。前肢は太く、右肢は直立し、左肢を後方へやや下げる。後脚先を小さく表すのは阿形と同様で、股間に雄性器を表す。頭部には枘穴があり、角があったとみられる。木取りは樹心を左後脚外へはずした心去り材である。吽形と阿形は材を左右二分して造った可能性がある。

上村天満宮の狛犬は両像とも前方を向きながら、前肢を阿形では右側、吽形では左側をやや後方に下げる特徴がある。吽形頭頂に角があったとみられ、後脚股間の雄性器は両像ともに表現している。胸を大きく張り、背筋を丸くした姿勢は古い形状で、中世にさかのぼる可能性がある。

３　太田住吉神社　阿形、吽形（図３-④、図４-⑤、⑥）

太田住吉神社には大小２組の木造狛犬がある。そのうち小さい方の狛犬は像高約38cm余りの吽形（図３-④）のみで、阿形は不明である。吽形は前両肢と左後脚を欠損するので、推測される姿勢は胸を大きく張り出し、前肢を立て、背筋を丸くして坐る。頭部は毛筋垂下のたてがみが後頭部を巡る。頭頂に角はなく、両耳も識別できない。鼻は低く、顎を前へ突き出し、くいしばった口の左右に下顎からの牙を表す。後脚は体側に張りついたように表し、欠損する後脚先は短いようである。下腹部股間に雄性器を大きく表し、尾は確認できない。

狛犬の正面観は左右対称で、用材は針葉樹柾目材を縦に使っている。

胸を前に大きく張り出し、背筋を丸くして坐る姿勢は東別所上村天満宮の狛犬とも共通するところがあり、本像は17世紀頃造像の可能性がある。

大きい方の狛犬は阿形（図４-⑤）と吽形（図４-⑥）の一対がある。両像とも前肢は後補（後世の補修）になり、後脚尻底の水平面を像底として姿勢を復元する。

阿形は像高43.4cm、像長53.6cmで顎を前へ突き出し、大きく開けた口と両眼を見開き、正面を向く。背筋はやや丸みをもつが、体部は胴長の直線円筒状で、後脚先を小さく前へ出す。前肢は体部とは別造で、胸先に枘差しして直立するとみられる。頭部は幅広の眉に丸く大きい目、小鼻が大きい獅子鼻で、上下の歯並をよく表した口など、獅子顔の表情である。眉の後方に耳を表し、たてがみは房状の毛筋垂下で後頭部を巡る。尾は小さく尻底から７支に分かれ、扇形に広がり頂部は丸くなる。

用材は欅の心持材で、体部に乾裂の干割れがあり、後脚間の干割れと複数の浅い擦痕を雌性器とする見方もある。

像底には以下の墨書きがある（『住吉神社史』2018）。

「寛文三年（1663）う年三月上三□　大佛師

□下大□　施主太田　次郎□□　権六　□助」

吽形は像高44.8cm、像長49.1cmで顎を前へ突き出し、上歯を見せて口を結ぶ。眉を寄せ、両眼を大きく開いて上を向く獅子顔で、胴長の体部と直立するとみられる胸先へ枘差しの前肢、短い後脚と小さい尾など、阿形との共通点が多い。頭頂に角はないが、後脚股間に雄性器を表す。側面観も前肢が直立し、背筋がやや丸みを持つ大凡三角形となる姿勢は阿形と同じである。

用材は欅の心持材で、頭部から背筋に劣化部分があり、表皮に近い部分であろう。阿形と吽形は同一材を上下に分け造像している。

吽形の像底にも阿形と共通する墨書があり、寛文三年の紀年銘や制作者名、施主名が分かる基準資料として貴重な狛犬である。

図４　木造狛犬（縮尺１：６）　⑤ 太田住吉神社 阿形　⑥ 太田住吉神社 吽形

（２）石造狛犬

４　伏木谷宇志多気社　阿吽不明形（図５-⑦）

宇志多気社の狛犬は、調査時７個の狛犬破片が他の自

然石とともに本殿床下にあった。接合して１体の狛犬に復元できたが、まだ頭部前面や前肢、背中などを欠損している。復元した狛犬は総高約30.5cm、前後長27.3cmで、総高のうち板状台座厚が2.5cmである。頭部前面を欠損しているので阿、吽の形別は不明である。

姿勢は胸を張り出し、前肢は直立するとみられ、背筋をやや丸めて坐る。後脚の脚先は低く、股間に雄性器はない。たてがみは毛筋垂下で、左右に振り分け、下端は左右対称で前方へ巻き込む。尾は小さく、三支に分かれ稜をもち立ち上がる。台座は尻後に角のある平面五角形となる。

石質は凝灰岩とみられ、体部表面は灰白色をなすが、

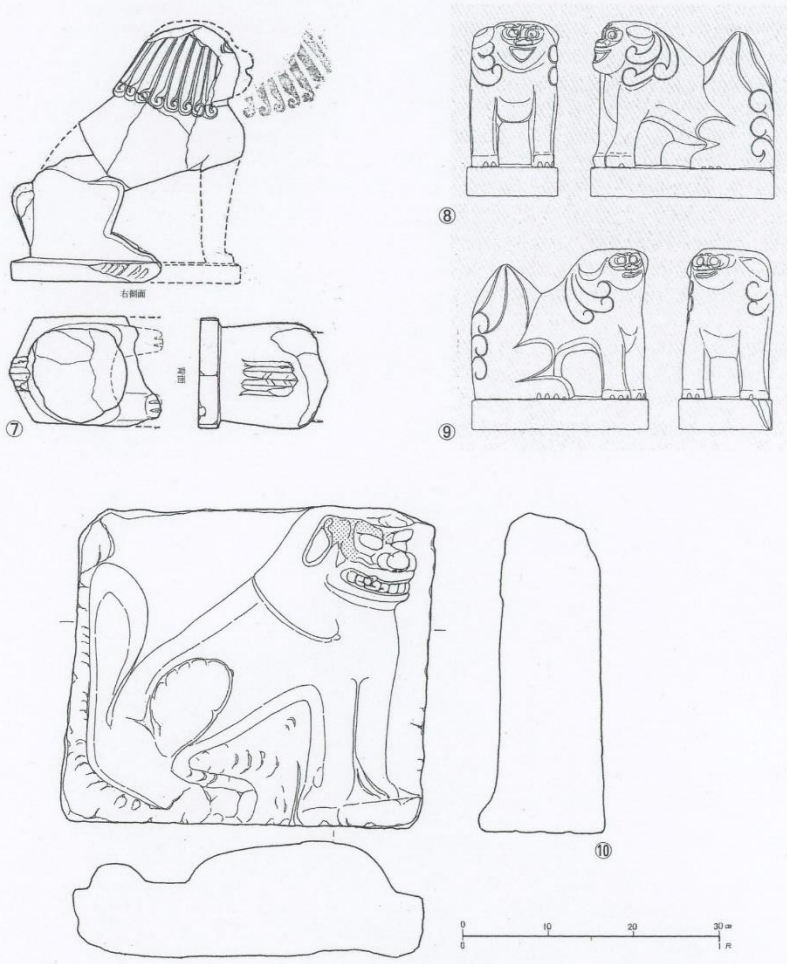


図５　石造狛犬（縮尺１：６）
⑦ 伏木谷宇志多気社　⑧ 西宮森八幡宮 阿形　⑨ 西宮森八幡宮 吽形　⑩ 小杉神社 吽形

社殿は大正９年（1920）に火災で焼失しており、狛犬は被熱によって変色や熱割れを被ったのであろう。狛犬の姿勢やたてがみの毛筋垂下、尾の形、五角形の台座などの特徴は、16世紀末から17世紀初め頃の越前狛犬と共通するところがあり、石材も笏谷石の可能性が高い。宇志多気社では本来阿、吽形一対となるもう１体の狛犬は不明で、その破片となるものも見当たらない。

５　西宮森八幡宮　阿形、吽形（図５-⑧、⑨）

狛犬は阿形（図５-⑧）と吽形（図５-⑨）があり、いずれも総高、前後長とも約21cm前後と小型で、長方形台座がある。

阿形は頭頂が平らで、逆三角形に開けた口と丸い目、低い鼻など愛嬌のある表情で、左前肢をやや引き、左斜め前方を向いて坐る。たてがみは左右に３房ずつ振り分け、下端は巻毛としている。耳は横長に低く表す。前肢は直立し肢脚間を刳り貫き、股間に雄性器はない。尾は像高の90％超の高さがあり、前後長は約40％で、小型狛犬としては極めて大きい尾である。太い尾の立ち上がる毛筋を線刻し、両側面に3巻きずつの巻毛を表す。

吽形も頭頂は平らで角はなく、結んだ口と丸い目、低い鼻にも阿形と同様に愛嬌があり、右斜め前方を向いて坐る。たてがみの巻毛や特大の尾、尾両脇の巻毛、姿勢なども阿形と共通する。

両像とも台座の幅、奥行いっぱいに狛犬を彫成しており、平らな頭頂も石材のサイズ制約によるとも考えられる。推定される石材の大きさは、高さ、幅とも約21cm（７寸）余、厚さ約12cm（４寸）の板状か、あるいは原材を二分したそれぞれの材寸の可能性もある。石質は砂岩質凝灰岩である。

狛犬の造像時期は尾の長大化する近世末から近代初め頃とみられる。

６　小杉神社　吽形（図５-⑩）

狛犬は矩形の板石片面に、吽形坐像を、厚肉で浮き彫りするもので、一般的には丸彫りとする狛犬とは異なる。姿勢は右横を向き、顔、胸、前肢を手前にみせる。前肢は直立し、後脚先を前に折り曲げ、尻を少し浮かせて坐る。尾は直立して大きく、板石いっぱいに狛犬を彫成している。

頭部は頭頂が平らで、角の有無は不詳である。右眉から右耳上部が剥落しているが左眉は力強く突出する。目は大きく開き目尻を上げ、鼻は丸みのあるダンゴ鼻である。口は横に大きく広げ、くいしばった歯並びと牙を見せることから、阿形との区別については歯が上顎のみで口をあけず、舌や下歯を表さないことのほか、太田住吉神社の狛犬吽形でも上歯を表わす例があることによる。たてがみに毛筋はなく、髪下をオカッパ状に輪郭を線刻している。

狛犬の底面は水平で自立するが、浮き彫りは正面観一面に対応するものであり、側縁や上縁の用材木口はノミ痕のままで　本来は隠蔽部分である。背面の大部分には塗装状の付着痕があることから、狛犬は壁面に据えられていたと考えられる。阿形は遺存しないが、阿吽一対で神殿の前面を構成していたであろう。

この狛犬の造像年代は類例がなく判然としないが、たてがみをオカッパ状に表現するのは石造の白山狛犬や越前狛犬に見られ、江戸時代前半から後半にわたる。県内でも両者の狛犬が散見でき、その影響も想定されることに加え、狛犬の尾が長大化するのは江戸時代後半から顕著になるので、本狛犬は江戸時代中頃以降と推定する。用材の石質は凝灰質砂岩である。

７　上和田熊野神社　阿形、吽形（図６-⑪、⑫）

熊野神社本殿階下のコンクリート基壇上には、現在向かって左側に石造狛犬の阿形、右側に吽形が台座短辺を正面にして配置されている。

阿形（図６-⑪）は像高46.7cm、総高60.3cmで、像高と像長がほぼ同じである。台座は狛犬と一石で、一面に「慶應二年（1866）七月」の刻銘がある。

阿形の顔は左斜め前方を向き、直立する前肢左上をやや引いて両前肢先を揃える。背筋は直線状で尻をつけて坐り、側面観は直角三角形状の姿勢である。頭部は大きく、大きい目と獅子鼻、口は顔いっぱい大きく広げ、くいしばった上下の歯と、下顎の牙を表すが舌は見せない。両耳は大きく側方に垂れる。

たてがみは毛筋を後頭部へ流し、両耳下に2個の巻毛を表す。前肢、後脚とも足先に指、爪を表すが、肢脚の旋毛、巻毛はない。尾は毛筋を三支にまとめて立ち上げ、上端が内湾する。台座幅より狛犬前後ともやや大きい。

吽形（図６-⑫）は像高45.4cm、像長43.8cm、総高59.0cmで阿形よりわずかに小さい。台座には「施主了念」の刻銘がある。

狛犬の姿勢は阿形とほぼ共通するが、胸を前へ張り出し、直立する右前肢をやや下げる。顔はやや上向きにして右斜め前方を向き、口を結び下顎の牙だけを表す。顎は胸先よりわずかに前へ出る。

たてがみは毛筋を後頭部へ流すのは阿形と同じだが、右耳下にのみ2個の巻毛を表す。尾は毛筋を三支にまとめて立ち上げるが、上端は外反する。

狛犬の石質は緑色凝灰岩（笏谷石か）で、用材は高さ約60cm（２尺）、幅約48cm（１尺６寸）、厚さ約24cm

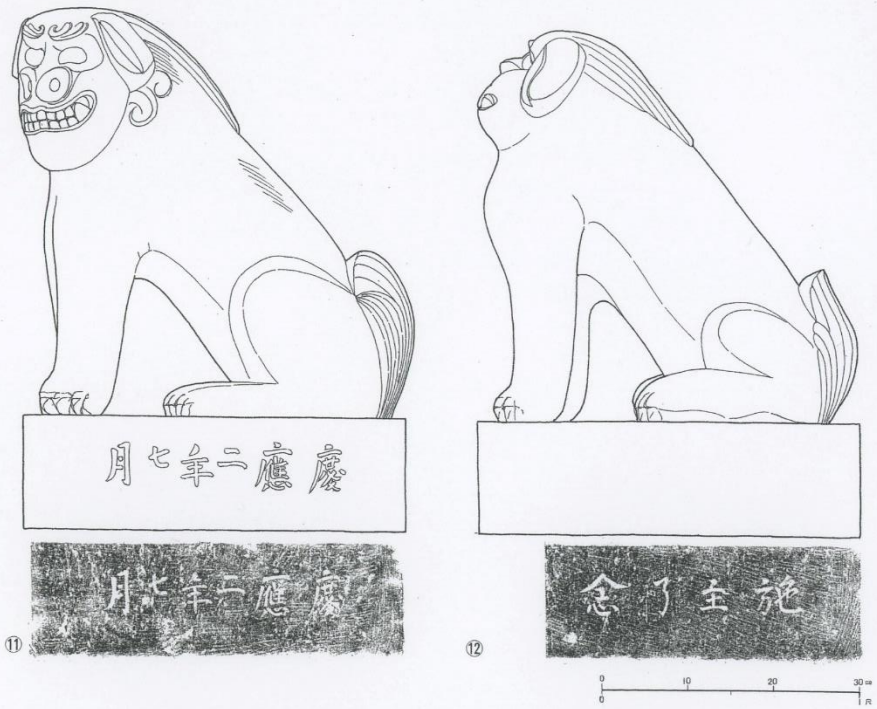


図６　石造狛犬（縮尺１：６）　⑪ 上和田 熊野神社 阿形　⑫ 上和田 熊野神社 吽形

（８寸）が想定され、石材サイズいっぱいに彫成している。

熊野神社の狛犬配置は当初、神殿に向かって右側に阿形、左側に吽形で、両像はそれぞれ斜め前方手前側を向き、台座の刻銘は拝殿側から見える配置であったと思われる。それがいつの時期に左右交替したか不明だが、基壇が改修された際、基壇幅が狭く、狛犬を縦方向に配置した可能性がある。

狛犬台座にある「慶應二年七月」と「施主了念」の刻銘は、当地における江戸期末の石造狛犬の基準資料となる。施主が寺僧であることが分かる狛犬である。

８　江波神社　阿形、吽形（図７-⑬、⑭）

江波神社本殿階下の石積基壇上には、本殿に向かって左側に石造阿形（図７-⑭）、右側に吽形（図７-⑬）がある。狛犬の阿形と吽形の配置が一般の配置とは異なる。狛犬にはそれぞれ長方形板状台座があり、その下には別石の基礎がある。吽形の基礎には中央に大きく「奉」を陰刻し、右側には「明治廿四卯年（1891）秋祭」左側に「施主左右共　石動　五郎丸屋　事　渡邉八左エ門」の刻銘がある。一方、阿形基礎には中央に大きい「納」と右側に「明治廿四卯年（1891）秋祭」左側に「セハ方　左右共　□島慶次郎　正村四平　中島孫□」の刻銘がある。石質は全て緑色凝灰岩（笏谷石か）である。

吽形は像高54.0cm、全長42.5cm、総高61.0cmで、頭部は左斜め前方を向き、左前肢をやや前に出し、前肢を直立して坐る。頭頂に角はなく、太い眉と大きく見開いた目、大きい獅子鼻で、耳まで届くような口を固く結んで上顎の牙を見せる。顎髭は短く線刻し牙下を巻く。耳は大きく側方へ垂れる。

たてがみは線刻で左右に振り分け、両耳下側面では先端を巻毛として３段に重ねる。巻き毛は左右対称の渦巻である。尾は像高の約３分の２と高く大きく、三

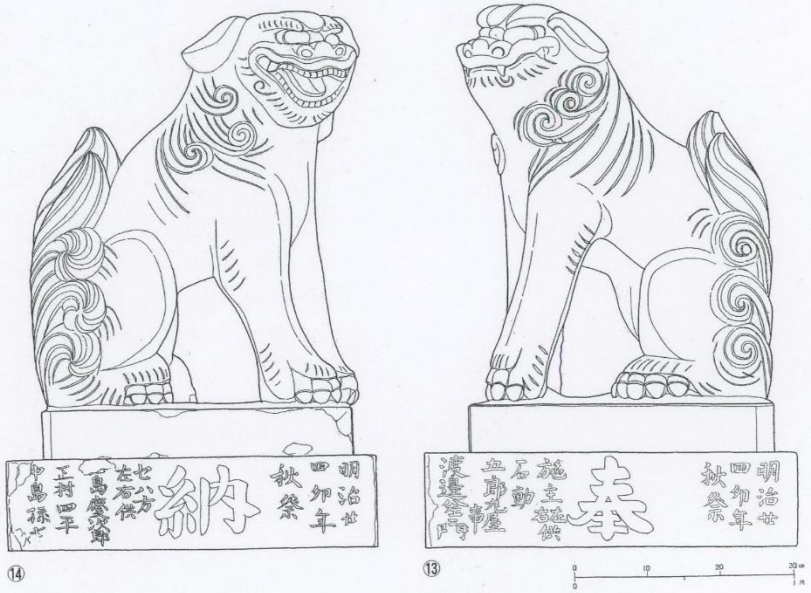


図７　石造狛犬（縮尺１：７）　⑬ 江波神社 吽形　⑭ 江波神社 阿形

支に分かれ線刻で捩巻き、その下方両脇に３段ずつの巻毛を添わせる。

脚部は両肢脚とも足先に指、爪を表し、前肢の後方と後脚にも施毛を線刻する。後脚股間に雄性器を表さない。

阿形は像高53.5cm、総高60.0cmで吽形とほぼ同形である。頭部は右斜め前方を向き、左前肢をやや前に出し、揃えた前肢を直立して坐る。

顔は太い眉と大きく見開いた目、大きい獅子鼻で、口を大きくあけ、上下の歯並びと、舌を見せ、正に威嚇する獅子の表情である。耳は大きく側方へ垂れるが、吽形よりやや高く表す。たてがみや尾、脚部の線刻は吽形と共通するところが多いが、尾両脇の巻毛毛筋を捩巻く表現で、吽形の渦巻きとは造り分けている。

阿形の口内は、赤く彩色されている。目も暗緑色で巻毛の一部や顎下にも暗色部分があるほか、体部に遺る白色は胡粉とみられることから、造像当初は全体に彩色されていた可能性がある。

基礎には中央に刻銘の「石動　五郎丸屋　渡邉八左エ門」は江戸時代に今石動町肝煎を勤めた五郎丸屋八左エ門から続く旧家とみられる。江波神社の狛犬は明治時代中頃の石造狛犬の基準資料であり、地元の世話人も分かり貴重である。

（３）陶製狛犬

９　庄雄神神社内天満宮 阿形、吽形（図８-⑮、⑯）

雄神神社境内の天満宮には軒先に阿形（図８-⑮）、吽形（図８-⑯）の陶製狛犬がある。

阿形は像高20.8cm、全長18.0cmと小型で、台座はない。胸を張り、鼻先、顎を直立する前肢より前へ出し、左斜め前方を向いて坐る。右前肢下を欠損するが、左前肢をやや下げる。

顔をやや上向きにして、丸く見開いた目、獅子鼻で、口は上と牙を歯見せくいしばった表情である。耳は縦長で頭側に垂れる。

たてがみは後頭部で左右に振り分け、左右の耳下を５連の巻毛で覆う。巻毛は右巻きと左巻きを使い分けている。顎髭も左右の巻毛で表す。尾は尻後に大きい巻毛と、両脇に低い巻毛を組み合わせる。

狛犬の焼成は良好で、明茶色の体表に釉はかかっていないが、小円を巡る細毛の斑紋が体部から脚部に散在する。体部から頭部にかけては中空で、像底から見ると体内は粘土紐の輪積みとなっている。

吽形は像高22.4cm、全長22.7cmで阿形よりやや大き

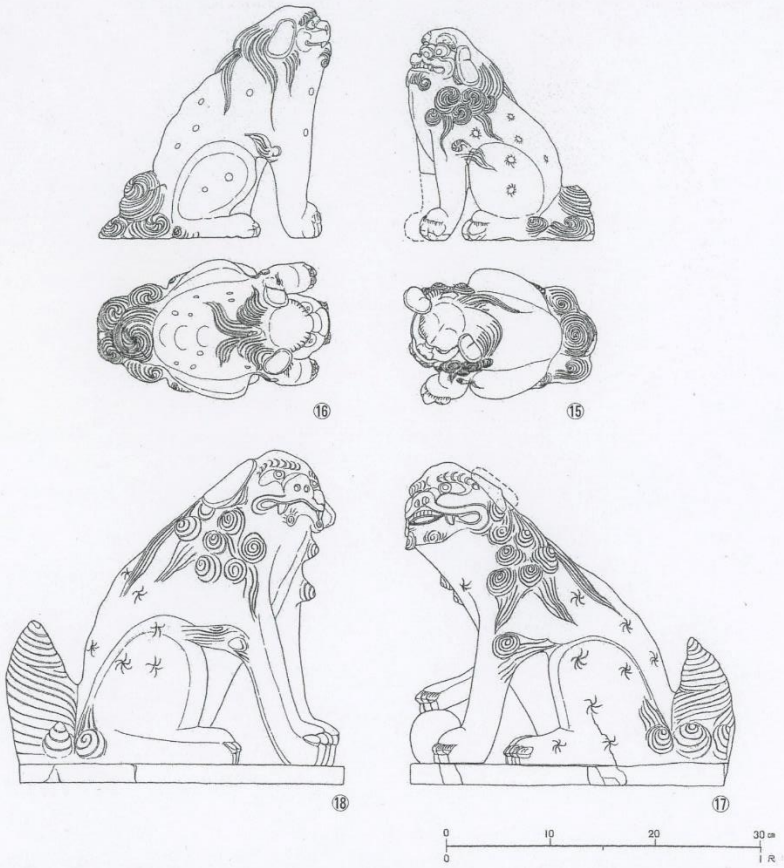


図８　陶製狛犬（縮尺１：５）　⑮ 庄 雄神神社内天満宮 阿形　⑯ 庄 雄神神社内天満宮 吽形
⑰ 矢木 八咫壺神社 阿形　⑱ 矢木 八咫壺神社 吽形

い。顔は前を向き、顎を突き出し、背筋をやや丸めて坐る。眉毛を線刻し、やや上向きの目、獅子鼻で、口をしっかり結び上顎の牙を表す。

たてがみの毛筋は背で左右に振り分けるが、耳下の巻毛はない。尾は中央の大きく低い巻毛と、その周りに小さい４個の巻毛で構成する。

体表は暗茶色で無釉になるが体部の斑紋は線刻ではなく、暗色の小円斑が散在する。体内は中空で輪積みの成形は阿形と共通する。

陶製狛犬の像容や頭部の造形、巻毛や足先細部までの表現は、優れた陶工の手になるが、制作時期や制作地は不明である。陶製狛犬は陶磁器生産地の東海地方では中世以降に見られるが、富山県内では稀少である。

10　矢木八咫壺神社　阿形、吽形（図８-⑰、⑱）

八咫壺神社本殿は拝殿、幣殿とは別になっており、その間の門に扉止めとしてかつては狛犬が置かれていたという。その狛犬は現在、本殿の階脇に移設されている。

阿形（図８-⑰）は総高30.4㎝、像高28.4㎝、全長31.8㎝で長方形台座がつく。頭部は左斜め前方を向き、左前肢を立て、右前肢は玉に乗せて坐る姿勢である。

顔はやや上向きで、眉毛を線刻し、大きい目と獅子鼻で、口を顔いっぱいに広げ、上下歯の間に舌をのぞかせ、牙を見せる。耳は縦長で左耳を欠失する。顎髭は巻毛を左右に分け、たてがみは毛筋を背中へ流す。耳下を6連の巻毛を渦巻状に高く巻き上げ、毛筋を下げる。尾は巻毛で太く立ち上がり、下部に低い渦巻の巻毛が５個並ぶ。

体表は平滑で、体部から脚部にかけて細毛を表す左方向の放射状刻文が点在する。狛犬は茶褐色で一部に光沢があり、赤瓦に似るが、長石粉か塩がけによる焼成の可能性がある。体内は中空で、像底から輪積み成形が見て取れる。

吽形（図８-⑱）は総高32.3㎝、像高30.5㎝、前後長32.2㎝で、阿形よりやや大きい。頭部は右斜め前方を向き、体部上半をひねるが、両前肢を揃える。顔はやや上向きで、眉毛、目、鼻は阿形と共通するが、口は固く結んで上顎の牙を表す。耳は縦長で頭側に張り付いた形である。顎髭は左右の巻毛で、たてがみの毛筋や耳下の巻毛数や形状は阿形と共通する。尾は太く巻上げ、下部両脇に低い渦巻の巻毛を組み合わせる。

背筋は丸く、体部から脚には放射状刻文が点在する。頭部に角はなく、股間の性器も表さない。体表は茶褐色で焼成が良く、体内は中空である。像底を抜き、体内は輪積のままである。

八咫壺神社の狛犬は同じ陶製の雄神神社天満宮狛犬との共通点は多いが、阿吽形とも対称的に斜め前方を向き、阿形右前肢を玉に乗せる姿勢や、巻毛の渦巻線がやや固い表現のほか、体部と脚部の細毛刻文、斑文などの特徴が分かれる。おそらく制作地は同じで、工人の特性か制作時期差によるものと考えられる。

Ⅲ　狛犬の向きと前肢

狛犬の配置は先に触れたように本殿に向かって右側が阿形、左側が吽形の一対が対面するのが一般的で、対面する狛犬は横配置で側面を見せることになる。狛犬は頭部が向き合うものばかりでなく、斜め前方を向くものも多い。斜め前方とは阿形は左側、吽形は右側で、本殿とは半対面になる。仮に頭部が向き合う狛犬をⅠ型、頭部が斜め前方を向く狛犬をⅡ型と分類すると、Ⅰ型には木造狛犬の下中条比賣神社阿形①（図中の通し番号をいう。以下同じ）、東別所上村天満宮阿形②・吽形③、太田住吉神社阿形⑤・吽形④⑥のほか石造狛犬の伏木谷宇志多気社の狛犬⑦、陶製狛犬では庄雄神神社天満宮吽形⑯がある。それ以外はⅡ型となるが、左斜め前方と右斜め前方に細分することもできる。以上から木造狛犬は何れもⅠ型になり、石造狛犬や陶製狛犬にはⅡ型が多い傾向を指摘できる。

前肢の位置も頭部の向きと対応することが多いが、木造狛犬では前肢を欠損するものや後補による前肢の狛犬もあり不詳とはいえ、両肢を揃える狛犬は頭部が向かい合い、斜め前方を向く狛犬は同じ側の前肢をやや下げるものが多い。この中で東別所上村天満宮の阿形②は右肢、吽形は左肢を下げている。また江波神社吽形⑬の頭部は左斜め前方を向きながら、左前肢を前に出す例外もある。江波神社の狛犬は吽形が右側、阿形が左側と、狛犬配置が一般的とは逆になるが、これを90度移動して縦配置とし、さらに別造りの基礎も阿形、吽形と入れ替えれば、本殿に向かって右に阿形で基礎の「奉」、左に吽形で基礎の「納」の斜め方向が向き合う狛犬配置が可能となる。

Ⅳ　狛犬の用材

木造狛犬では樹木の使い方、木取りについていくつかの特徴を挙げることができる。

下中条比賣神社阿形①では直径約60㎝超の輪切り状材を、一木で心持ちのまま縦使いとしている。左後脚には枝の節を取り込んでいる。御神木であったかもしれない。

上村天満宮阿形②・吽形③は小像ではあるが、心去り材の縦使いで、輪切り状材を二分してそれぞれを阿形、吽形に使い分けているとみられる。

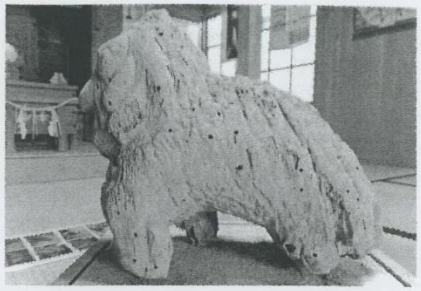
太田住吉神社吽形④は縦使いで、目のつんだ心去り材である。大木を東別所上村天満宮狛犬のように使い分けている可能性がある。

太田住吉神社の阿形⑤・吽形⑥は樹心をもつ丸太材を体部として、前肢を別材で枘差しで組み合わせている。両像を前後に使い分けている。

樹種については太田住吉神社阿形⑤、吽形⑥が欅、阿形④が杉とみられるが、他の狛犬の樹種は未確認である。

石造狛犬では西宮森八幡宮阿形⑧・吽形⑨は像長、

神殿狛犬　①下中条比賣神社



神殿狛犬　②(右)・③(左)東別所上村天満宮

神殿狛犬　④太田住吉神社

神殿狛犬　⑤(右)・⑥(左)太田住吉神社

像奥が台座幅、奥と、ほとんど変わらない像形である。頭頂も水平であることから、この狛犬は石材寸法の制約いっぱいの彫成とみられるが、同様に狛犬の台座幅、奥いっぱいの像形は上和田熊野神社阿形⑪・吽形⑫、江波神社吽形⑬・阿形⑭にみられ、小杉神社吽形⑩も板状石材形状に合わせた彫成である。これらの石材が規格化された材寸であれば、石材産出地からの用材を仕入れ、当地で制作したとも考えられる。

石質は上和田熊野神社、江波神社の両狛犬とも緑色凝灰岩で、笏谷石とみられるが、伏木谷宇志多気社の狛犬は、各部の像形特徴が越前狛犬と共通することから、この狛犬は越前で造られ、当地へもたらされたものである。

陶製狛犬の庄雄神神社天満宮、矢木八咫壺神社の阿吽形両狛犬は粘土輪積手法で、瓦と同様の焼成、色調である。庄川右岸の福山地区周辺で多く生産された瓦窯と関連する陶製狛犬の可能性がある。

V　狛犬の造像年代

木造狛犬では太田住吉神社阿形⑤・吽形⑥の像底に「寛文三年　う年三月」の墨書紀年銘があり、木造狛犬の基準資料である。木造在銘狛犬では富山県内でも最も古く位置付けられる。太田住吉神社吽形④は胸を大きく張り出し、前肢を立て、背筋を丸くして坐る姿勢は古様で、たてがみの毛筋が垂下しオカッパふうに表すのは17世紀の越前狛犬に見られることから、阿形⑤・吽形⑥に先行する狛犬である。

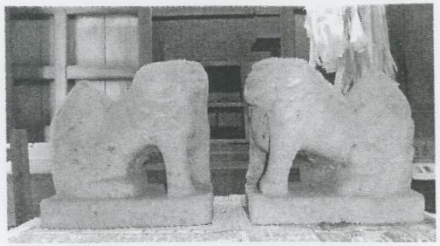
東別所上村天満宮の阿形②・吽形③の姿勢は太田住吉神社吽形④と似るが、たてがみは頭部側面で房状に表す。頭部側面の房状たてがみは下中条比賣神社阿形①に見られ、たてがみは房状多段となることから、毛筋垂下でオカッパふうたてがみの狛犬より古く位置付け、16世紀後半から17世紀頃の狛犬とみたい。

石造狛犬では上和田熊野神社阿形⑪の台座に、「慶應二年七月」の刻銘があり、江波神社吽形⑬・阿形⑭には「明治廿四卯年」の刻銘があるので、これらは石造狛犬の年代基準資料となる。

伏木谷宇志多気社の狛犬⑦はたてがみの毛筋垂下端が巻毛を表し、五角形台座となることから16世紀末から17世紀初め頃に位置付けられる。

西宮森八幡宮阿形⑧・吽形⑨の両像は、小型であるが尾が極めて大きく、尾の大きさからみれば、上和田熊野神社狛犬から江波神社狛犬へ尾が長大化することと、たてがみや尾脇の巻毛特徴が江波神社狛犬との共通性があることから、江波神社狛犬に近い時期とみられる。

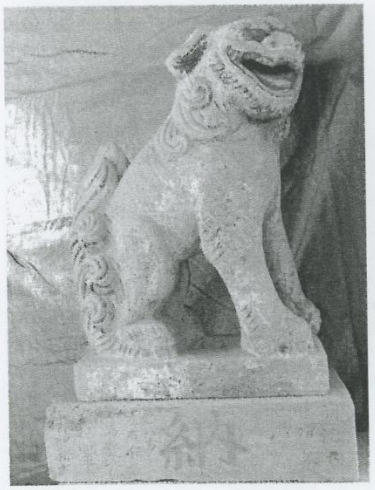
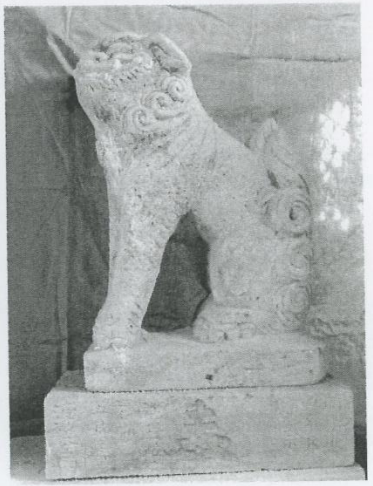
神殿狛犬　⑦伏木谷宇志多気社



神殿狛犬　⑧(右)・⑨(左)西宮森八幡宮

神殿狛犬　⑩小杉神社

神殿狛犬　⑫上和田熊野神社

神殿狛犬　⑬(右)・⑭(左)江波神社

神殿狛犬　⑮(右)・⑯(左)庄雄神神社内天満宮

神殿狛犬　⑰(右)・⑱(左)矢木 八咫壺神社

小杉神社吽形⑩の尾はやや大きいが巻毛はなく、オカッパ状のたてがみが毛筋を表さず輪郭だけに省略されているので、18世紀代以降であろう。

陶製狛犬に在銘資料はないが、庄川右岸福山地区周辺の瓦生産と関連づけた場合、褐釉に先行する赤瓦系瓦が生産された明治時代前半頃の可能性がある。

今回調査した狛犬を木造、石造、陶製の全体を通して造像時期を整理すると、16世紀末から17世紀ごろの狛犬には石造の伏木谷宇志多気社狛犬や、木造では東別所上村天満宮阿形・吽形、下中条比賣神社阿形があり、太田住吉神社吽形が続く。17世紀では寛文三年（1663）記銘の太田住吉神社阿形・吽形があり、19世紀代後半に慶應二年（1866）刻銘の上和田熊野神社阿形・吽形や、明治廿四年（1891）刻銘の江波神社吽形・阿形がある。その間に、小杉神社吽形の18世紀代があり、西宮森八幡宮の阿形・吽形は江波神社狛犬に近い時期であろう。陶製狛犬の雄神神社天満宮、矢木八咫壺神社の阿形・吽形は19世紀形後半とみられる。

砺波市域では以前に調査された柳瀬比賣神社の石造狛犬阿形があり（砺波市教育委員会2016）、残存する体部上半から推定される像高は約64cmと大きく、16世紀頃の越前狛犬との共通点も多いが、共伴した石仏や神像は15世紀代とみられており、石質も同じシルト質微粒砂岩（藪田石）である。いずれにしても砺波市域では最も古く、かつ大型の石造狛犬である。紀年銘のない木造狛犬は放射状炭素年代測定（AMS法）や、樹種同定と年輪年代測定などによる検討余地が残されている。

まとめ

神殿狛犬は神殿の屋内、もしくは軒先に阿形・吽形が一対で配置され、屋外の参道脇で基壇を備える参道狛犬とは区別される。

対面する阿吽一対の狛犬は頭部が向き合うⅠ型と、頭部が斜め前方を向くⅡ型に分けることができる。木造狛犬は全てⅠ型で、石造狛犬や陶製狛犬にもⅠ型はあるが、Ⅱ型が多い。前肢の位置も頭部の向きと対応することが多く、前肢を揃える狛犬はⅠ型が多く、頭部が斜め前方を向くⅡ型では、同じ側の前肢をやや下げるが、一部例外もある。

狛犬の材質は木造、石造、陶製、金属造がある。木造狛犬は一木のほか別材を組み合せ接ぎ合わせるものがあり、樹木からの木取りは木目方向を像高方向と像長方向の縦使いに分け、さらに心持ち材と心去り材を使い分けている。下中条比賣神社阿形、上村天満宮阿形・吽形、太田住吉神社吽形④は像高方向の縦使い、太田住吉神社阿形⑤・吽形⑥は像長方向縦使いの心持ち材で、前肢を枘差しで組み合わせている。上村天満宮阿形・吽形、太田住吉神社吽形④は心去り材である。心去り材では輪切り材から複数部材を分割することができる。

石造狛犬は石材産出地近辺で制作した伏木谷宇志多気社狛犬と、切石用材を仕入れて当地で制作したとみられる西宮森八幡宮、上和田熊野神社、江波神社の各阿形・吽形がある。

陶製狛犬は遠隔地の陶磁器生産地から運ばれたものではなく、庄川右岸福山地区周辺の瓦生産地で制作された可能性がある。

狛犬の造像年代は紀年在銘狛犬の太田住吉神社寛文三年（1663）、上和田熊野神社慶應二年（(1866)、江波神社明治廿四年（1891）を基準として、他の狛犬の造像時期を試みたが、今回調査した狛犬では16世紀後半から17世紀代の木造、石造狛犬が見られる。砺波市域では以前に調査された柳瀬比賣神社の石造狛犬阿形が16世紀以前にさかのぼり、最も古く位置付けられる。

小型の木造狛犬で古様の東別所上村天満宮狛犬の類例は南砺市上梨白山宮狛犬や、西赤尾八幡社狛犬など山間地の神社に残っており、南砺市下梨地主神社狛犬や大豆谷八幡宮狛犬も比較対象になる。遠隔地からもたらされた越前狛犬とみられる伏木谷宇志多気社狛犬

も山間地にあって牛嶽信仰の背景や、山間地での狛犬分布の広がりをさらに探究する課題が残されている。

最後になるが、本調査にあたってご協力いただいた各神社の宮司、氏子総代、世話方、氏子、各地区の公民館等の皆様に深く御礼申し上げます。

（にしい・たつよし　砺波市文化財保護審議会委員）
（なかしま・よしえ　前砺波市教育委員会）

参考文献

長島勝正・風間耕司『富山文庫８　越中の彫刻　祈りと美の系譜』巧玄出版．1975年

平村史編集委員会『越中五箇山　平村史上巻』平村．1985年

伊藤史朗『日本の美術8』№279狛犬　至文堂．1989年

砺波市史編纂委員会『砺波市史資料編４　民俗・社寺』砺波市．1994年

三遊亭円丈『THE狛犬！コレクション』立風書房．1995年

尾田武雄「富山県の野にある狛犬」『北陸石仏の会研究紀要』第3号　北陸石仏の会．1999年

上杉千郷『狛犬辞典』戒光祥出版．2001年

利賀村史編纂委員会『利賀村史3　近・現代』利賀村．2004年

愛知県陶磁器資料館『愛知県陶磁器資料館コレクション陶磁のこま犬百面相』．2005年

富山市大山歴史民俗資料館　平成22年度富山市大山歴史民俗資料館企画展『さまざまな狛犬の形と姿』．2010年

三井紀生「中・近世における越前狛犬の特徴と地方進出について」『若越郷土研究57の1』福井県郷土史懇談会．2012年

砺波市教育委員会『柳瀬比賣神社の石造物報告―氷見藪田石製中世石造物の一括発見』．2016年

住吉神社合祀百周年記念奉祝奉賛会『住吉神社合祀百周年記念奉祝奉賛記念住吉神社史』．2018年

砺波散村地域研究所研究紀要　第38号

令和３年６月30日

編集・発行　砺波市立砺波散村地域研究所

富山県砺波市太郎丸80
電話　0763（34）7170
FAX　0763（34）7182
〒939－1363
Ｅメール sansonken@city.tonami.lg.jp

印刷　株式会社 アヤト